第29回　日文研フォーラム

■

ソビエットの日本文学翻訳事情

―古典から近代まで―

Translation of Japanese Literature in the USSR: From Ancient to Modern

■

アレクサンドル A. ドーリン
Aleksandr A. Dolin

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長　梅原　猛

● テーマ ●

ソビエットの日本文学翻訳事情

－ 古典から近代まで －

Translation of Japanese Literature in the USSR: From Ancient to Modern

● 発表者 ●

アレクサンドル A. ドーリン

Aleksandr A. Dolin

発表者紹介

アレクサンドル　A．ドーリン
Aleksandr A. Dolin

ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員

1949年生まれ。1971年モスクワ国立大学附属東洋語大学卒。同年東洋学研究所入所、同時にモスクワ国立大学附属アジア・アフリカ諸国大学の大学院入学。1978年文学Ph.D取得。1971－1991年ソ連科学アカデミー東洋学研究所の研究員（下級・中級・上級）。1988年ソ連作家同盟員になる。1990年10月－1991年6月国際交流基金の奨学金で来日。国文学研究資料館で研究する。専攻は、日本の詩歌、又は武術の理論。主な論文－60以上。

主な本

- 「日本浪漫主義論」モスクワ、ナウカ社、1978
- 「日本現代詩論」モスクワ、ナウカ社、1984
- 「日本近代詩論」モスクワ、ナウカ社、1990
- 「Kempo-die Kunst des Kampfes (Ostasiatische Kampfsportaslen)」Berlin,1990
- 「拳法－武術の伝統」モスクワ、ナウカ社、1990
- 「ソ連における日本文化の研究」モスクワ、ナウカ社、1984、1990

- 「秋の蝉」（江戸時代の和歌と小歌）モスクワ、ナウカ社、1981
- 「日本現代詩撰集」モスクワ、プログレス社、1981
- 「四季」（近代短歌、俳句集）モスクワ、ラドガ社、1984
- 「淋しい蟋蟀」（古典俳句集）モスクワ、デトスガヤ・リテラトラ社、1987
- 「ものの声」（現代詩集）モスクワ、ラドガ社、1989
- 「月影」（近代日本詩歌集）モスクワ、ナウカ社、1991
- 「古今和歌集」モスクワ、ラドガ社、1992　　等。

ソ連における、日本文学の事情を話す場合、まず第一に、その翻訳をしている人間について話さなければならないと思います。その日本学の歴史を眺めて、ソ連の日本学者の悲劇的な運命について話したいと思います。

ソ連の日本学は、とても長い歴史を持っています。ご存じのとおり、ロシアは日本の隣国ですから、革命前にも日本に対する興味は、非常に高かったのです。だから、二十世紀の初めに、ペテルブルグやモスクワ、ウラジオにも日本語科が出来ました。その日本語科の教授はみな日本に、割に長い間住んで、日本語も、日本文学や歴史にもとても詳しい先生たちでした。そのうちから三人のとても有名な学者の例を挙げます。

一人はコンラッド(N.Konrad)博士。彼は今のソ連の日本学の創立者だと思います。他はネブスキイ(N.Nevsky)博士、もう一人はユリシイフ(S.yeliseyev)博士です。その三番目の先生から始めます。

ユリシイフ博士は、日本で数年を過ごし、革命後日本から帰って、3〜4年間ぐらいソ連に住んで、日本古典文学について素晴らしいものを書いてから亡命しました。アメリカに行って、アメリカの日本学の創立者の一人になっています。

ネブスキイ先生は、素晴らしい言語学者でした。日本語の他に中国語・朝鮮語・

チベット語・すべてのヨーロッパ語がよくできました。彼は十年間以上日本に住みました。いくつかの日本の大学で教えたこともあります。彼による翻訳について言えば、まず第一にアイヌの民謡とか、宮古島の民謡を挙げなければなりません。ネブスキイは革命後日本にずっとおりましたが、三〇年代の初めにソ連政府の招待で、レニングラードに帰りました。3年間ぐらいして、スターリンの国安省（KGB）で逮捕されて、シベリアのラーゲリで死にました。

コンラッド博士も、一九三八年に逮捕されました。彼にはレニングラード大学の日本科の卒業生の、多くの弟子がありましたが、ほとんど皆逮捕されて、シベリアのラーゲリに追放されました。ある者は死に、ある者は生き残りました。だから、今のソ連の日本学は、そのスターリンの暴力の犠牲者になった、英雄的な人たちの仕事の結果だとも思えます。

やっぱりスターリン時代には、日本学はよく発展することができなかった。もちろん、まず第一に思想的な関係で、その時には、例えば古典文学を翻訳することはほとんどできなかったのです。二〇年代とか三〇年代には、日本のプロレタリア文学の作品ばかりが翻訳されていました。小林多喜二とか宮本百合子、徳永直などの小説が、割に大きな発行部数で出版されました。しかし、読者の関心は

プロレタリア文学だけでなく、まず第一に日本の古典文学に対するものが非常に大きかったのです。革命前にも、いくつかの日本の詩歌集やおとぎ話集が発表されていましたから、知識人の読者はその本を大事に保存していました。

戦後、初めて一九五四年に、古典日本詩歌のアンソロジーが出版されました。そのアンソロジーは二人の女子の翻訳者のおかげで出されました。一人はグルスキナ(A.Gluskina)先生、もう一人はマルコワ(V.Markova)先生です。その二人は今でも生きていますが、二人とも今は八五才を越えて、ほとんど仕事をしていません。そのアンソロジーには『万葉集』から二十世紀の初めまでの日本の詩歌が少しずつ収録されていました。読者の反応は非常に著しく、皆感動して、新聞・雑誌に評論がたくさん載りました。それはすぐに再版されました。長い間、古典日本文学と関係のある、ただ一つの本として残っていました。しかし、知識人は皆それを手に入れて、大事に家に保存していました。

そして、六〇年代に、もう少し日本古典詩歌の本が現れます。芭蕉集とか、古典俳句集、短歌集も出てきています。それもまたあの二人の先生、マルコワ先生とグルスキナ先生の作品でした。七一年に、グルスキナ先生は、『万葉集』全体を発表しました。実に、グルスキナ先生は、その『万葉集』の翻訳をずいぶん前に

準備していました。五〇年代の初めに完成していましたが、その本はほとんど二〇年間出版社に置いてありました。紙の不足とか、印刷所の不足とか、いろんな条件に恵まれなかったのです。二〇年間、人生の三分の一です。もし、その本が、例えば五〇年代の初めに出版されたら、初めての『万葉集』の西洋語訳になったでしょう。しかし、七一年に出ましたから、ちょっと遅かったのです。その時には、もう英訳も出版されていました。だから、グルスキナ先生の翻訳は、もう初めてのヨーロッパ語の翻訳ではなかった。残念なことに。実際にそうでしたが、出版が遅かったからしかたのないことです。

七〇年代に入って、日本の古典文学の研究も、翻訳も、盛んになりました。七〇年代の終わり、八〇年代の初めに一番有名な日本文学の名作が、初めてロシア語で紹介されました。例えば、私の先生であったリボワ教授は、『平家物語』全体を訳しました。私もその翻訳に参加して、その中の短歌や韻文を訳しました。

そしてイェロマコーワ（L.Yermakowa）という、私の世代の若い日本学者は、『大和物語』を発表しました。もう一人の私の同僚、デリューシナ（L.Delyusina）さんは、『源氏物語』全体を訳しましたが、今でも発表されていません。出版社に置いてあり、順番を待っています。来年か再来年には刊行されるはずだと思いま

す。

それから、最初のアンソロジーの発表者であったマルコワ先生は、近松門左ヱ門の浄瑠璃をずいぶんたくさん訳しました。近松の演劇は、とても人気があります。そして、井原西鶴の小説も同時に、ロシア語で初めて出されました。何人かの翻訳者がその翻訳に参加しましたが、例えばリボワ先生とか、ピーノス先生などが参加しましたが、質のいい翻訳として、若い学者、ドブロボリスカヤ(T.Dobeovolskaya)さんの翻訳を挙げたいと思います。

散文の名作もたくさん出されてきていますが、大衆的な読者の興味は、まず第一に日本の詩歌に集中されたと思います。詩歌は、小さな詩集が現れてもすぐに売り切れました。発行部数はとても多かったにもかかわらず一日で売り切っています。そういう事情は今でも続いています。それは面白い現象ですけれど、ソ連の本の市場の特徴じゃないかと思います。

ソ連の読者にとっては、日本のイメージは非常に理想的なイメージです。そのイメージはほとんど全部、日本の詩歌・美学・美術・生け花で代表されているから、ソ連の人たち、大衆は、日本の美術と日本の詩歌に感心しているんですね。だから、例えば私の訳した日本の古典俳句は、非常に大きな部数が出ました。三

〇万部を一日で売り切ったのです。私は読者から、たくさんの手紙を受け取りました。「本を送ってくれ」と。しかし、私は持っていませんでした。

一九八〇年に、『世界古典文学名作』というシリーズで、日本の古典散文と、日本の古典詩歌という二冊が出版されました。その部数も三〇万部でした。それも、値段が非常に高かったにもかかわらず、一日で売り切れました。

いちばん人気のある、日本の古典の散文の作品を例に挙げれば、それは『とはずがたり』でした。ところでその『とはずがたり』は、日本の古典文学ではよく知られていない作品ではないかと思います。割に最近発見された原稿ですから。しかし、そのロシア語の翻訳はリボワ先生によって行われ、非常に人気になりました。再版が何回もあって、ロシア語ばかりでなく、ソ連のいろいろな共和国語にも、ロシア語から重訳されたこともあります。グルジア語、ラトビア語、リトアニア語などです。特に女性の読者に人気がありました。

近代文学は、戦後からとても積極的に翻訳されてきました。例えば芥川龍之介の短編小説は、撰集のほとんどがロシア語に翻訳されました。徳冨蘆花の『黒潮』はソ連の読者もよく知っています。夏目漱石のいちばん有名な小説『こころ』、『坊ちゃん』、『三四郎』、『それから』、『門』、『我輩は猫である』、みんなロシア語に

翻訳されました。

有島武郎の作品も、島崎藤村の二つの小説『破戒』と『家』もロシア語で出ました。

近代の詩歌も、今はもう割によく翻訳されています。正岡子規、斎藤茂吉、高浜虚子、高村光太郎、萩原朔太郎、北原白秋、木下杢太郎等々の有名な詩人、歌人、俳人は、いくつかのアンソロジーに集められて、ロシア語で出版されたことがあります。

その本を翻訳していた人たちの大部分は、同時に日本学者でしたから、それを研究したり、論文を書いたりしていました。学位論文もあります。だから、翻訳された小説も、詩も、演劇も、割合によく研究されています。その意味で、ソ連の日本学のレベルはとても高いとも言えるんですが、そういう研究の都合が、ペレストロイカ以前にはよくなかったので残念なことに、日本に行くチャンスがとても少なかったのです。しかし、ロシアの日本学者は、一生懸命図書館で研究したり、家の書斎で頑張って、翻訳を沢山したりしていましたから、やはり日本学のレベルは悪くなかったと思います。

現代文学について言えば、先に申し上げたとおり、昭和時代から始まる現代の

文学は、プロレタリア文学から始まりました。しかし、今ソ連でいちばん読まれている日本の作家は、みなさん誰だと思われますか。まず第一に、川端康成を挙げましょう。いちばん人気がある日本の作家です。その次は、谷崎潤一郎です。

川端の小説の主なものは、ほとんど長編小説も短編小説も翻訳されたことがあります。『千羽鶴』、『雪国』、『湖』、等々です。谷崎の作品は大きな二冊の全集で発表されました。一冊は『細雪』でした。もう一冊は、有名な短編小説、『刺青』、『春琴抄』、『吉野葛』、『小さな王国』等です。日本の純文学の、ソ連におけるいちばん有名な作家です。その他に、安部公房、大江健三郎を挙げなければなりません。彼らのいちばんすぐれた翻訳者は、モスクワ大学の教授である、グリブニン先生です。グリブニン先生は、この間二ヵ月間ぐらい早稲田大学で教えていまして、今ソ連に帰ったところです。彼は、安部公房と大江健三郎の有名な小説を自分ひとりで訳しました。

それから、三島由起夫はソ連では最近まで、その思想のために、禁止されていました。ご存じのとおり、三島はその晩年にファシストになったのです。だから、例えばその初期の小説は、晩年の思想とあまり関係がなかったにもかかわらず、やはりその作品全部が禁止されていました。しかし、去年、初めて二つの小説が

ロシア語に、雑誌で発表されました。一つは『憂国』、もう一つは『金閣寺』です。しかし、その翻訳者はいろいろな困難に直面しました。今でも、本でその小説を出版することはできません。その翻訳者の名前は、グルジア語ですが、チカルティシュイリ。若い、才能ある翻訳者です。彼はまた、森村誠一の『人間の証明』を訳しました。

もちろん、日本の短編小説は、ソ連でとてもよく代表されていると思います。最近の二〇年間で、四冊の日本の短編小説集のシリーズが出版されました。その他、いろんな撰集も出たことがあります。その短編小説の著者としては、たとえば太宰治をはじめとして、石川達三、上林暁、小島信夫、源氏鶏太、永井荷風、これは古いですね。丹羽文雄、西野辰吉、野上弥生子、林文子、堀田善衛、江戸川乱歩、遠藤周作、阿部知二等々、ほとんどの人気のある現代日本の小説家は、短編小説撰集に入っていました。堀田善衛の本も、理由はよくわからないけれど、さかんに翻訳されていました。少なくとも、六つの小説がロシア語に翻訳されています。

最近は、山本周五郎の大きな撰集も初めて出版されたのです。

もちろん大衆文学として、日本の推理小説はとてもよく翻訳されています。中

薗英介とか、松本清張、森村誠一等々の名をあげることができます。

日本の児童文学は、ただひとりの翻訳者が訳しています。ロンスカヤ先生です。彼女は片山昌造、中川李枝子、坪田穣治、松谷みよ子、早乙女勝元、宮本泰子、大野充子、砂田弘等の児童小説を翻訳しました。

しかし、そういう、割に恵まれている事情にもかかわらず、翻訳者はもちろん困難に向かっている場合も多いです。例えば、児童文学を翻訳しているロンスカヤ先生は、最近、といっても五年ぐらい前ですが、宮沢賢治の児童小説を訳しましたが、今でも出版することができません。出版社がみな断ります。

原因はわかる。今はペレストロイカの関係でロシアは市場経済に入っています。だから出版社は、まず第一に、推理小説や冒険小説をなるべく多く印刷したいのです。純文学は特に困っています。ロシアの純文学も、翻訳の純文学ももちろんそうです。

詩歌は、今はもうほとんど出版することができません。読者は詩歌は大好きですが、出版社は断ります。何故かと言えば、詩歌のための原稿料は割に高いのです。例えば散文よりも高いのです。ソ連では、作家または翻訳者は印税を貰えません。だから、決定された原稿料だけを貰います。その原稿料は、詩歌の翻訳の

場合、散文の二倍くらい高いのです。もともとおかしいと考えられています。そのとおりです。だから、今出版社にとっては、詩歌は非常に不便です。利潤が出てこない。原稿料が高くて、例えば推理小説とくらべて、部数はそんなに大きくない。だから、古典短歌や古典俳句の代わりに、いちばん簡単な推理小説を出版するほうがいいと出版社は思っています。残念なことに。

しかし、日本学者と翻訳者は頑張っています。『源氏物語』もその順番を待っているのです。とにかく出るはずです。その他に、私も『古今集』を今年完成し、来年出版しようと思います。もうすでに契約がありますから、出版社は出版しなければならない。しかし、後がどうなるか誰もわかりません。みなさんがご存じのとおり、ソ連での紙の不足はすごいです。だからいちばん人気のある雑誌でも、時々その出版が止まってしまいます。ある出版社は、前に国家から金を受けることになっていました。今は、その国家の渡し金が止まったから、自分で金を儲けなければならない。だからこそ、まず第一に冒険小説とか、ＳＦを印刷し始めました。

しかし、もし、日本側から援助があれば可能性もあると思います。例えば、国際交流基金も、こういう援助を他の国に度々与えています。こういう援助があれ

ば、今のソ連の混乱時代を生きのびてもちろん日本文学の出版を続けることもできると思います。

もう少し、日本文学と日本文化のイメージについて言えば、先に言ったとおり、ロシアでは昔から、日本は朝日の国、理想的な国と認められていました。最近は、特に戦後は、日本の経済成功、または技術、科学の成功のおかげで、そのイメージはもっときれいになりました。文学面ばかりでなく、日本の武道について言えば、ソ連では青年の中で日本の武術は非常に人気です。同時に、空手とか合気道、柔道、剣道を稽古している者は、必ず日本文化にも興味を持っています。一般に言うと、日本文化に対する興味は高いです。だからみんなは、日本の詩歌、または散文を読んだり、日本の絵画の展覧会に行ったりしています。ある者は空手を習って、同時に生け花とか、碁を習い始めている。その日本のイメージは実際にあっているかどうかわかりません。実際と比べてもっと理想的だと思います。しかし、それはいいかもしれない。そのイメージこそが、ソ連の青年には東洋文化への憧れを起こしていますから。だからこそ、我々ソ連の日本学者、または日本文学の翻訳者の努力は、今の時代にもとても重要な役割を果たしているのです。

特に今のソ連では、経済の困難のために道徳、モラルのレベルも非常に落ちま

した。モラルがとても低くなっています。多くの人は、闇商人になりました。闇商売は非常にさかんです。だから、私の考えでは、そういう状態で、特に青年の道徳を育てなければならないのです。その意味で、日本の文化、文学、美術は、非常に重要な地位を占めると思います。

だから、我々は自分の知識を利用して、日本の文化を宣伝したり、その文化を通じて、今のソ連の青年の世代をなるべくよく育てるように、努力しましょう。

以上です。

＊＊＊発表を終えて＊＊＊

豊かな伝統を持っているロシアの日本学は、近年新しい段階に入りました。自由と民主主義の理想が実現されたロシアの社会では、東洋学を含めてすべての人文学の研究は、近い内に根本的に改造され、改善すると期待しております。我々日本学者としては、露日文化交流のより一層の発展、又はロシア科学の国際化のために全力を尽くして働いています。日文研フォーラムのおかげで、日本のオーティエンスにロシア日本学者の活動を紹介する可能性を頂いて、心から感謝の意を表します。

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ（ピサ大学助教授） Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン（日文研客員助教授） Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン（大阪大学助手） Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ（日文研客員教授） Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋　彙七（慶北大学校師範大学副教授） SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト（ウィーン大学教授） Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び－拳を中心に－」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア（テキサス大学助教授） Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像－現実と幻想－」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ（オベリン大学助教授） James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性－恵信尼の書簡－」

⑨	元. 2.14 (1989)	厳　安生（北京外国語学院日本語学部助教授） YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉　敬文（遼寧大学日本研究所副所長） LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ（オベリン大学助教授） Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏　剛（京都工芸繊維大学助教授） HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント（東洋大学助教授） Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ（ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授） KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
15	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド（フランス国立高等研究院教授） Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪　向榮（中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授） WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
17	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント（ミネソタ大学助教授） Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ（フランス国立科学研究所助教授） Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2．1．9 (1990)	スミエ・ジョーンズ（インディアナ大学準教授） Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2．2.13 (1990)	カール・ベッカー（筑波大学哲学思想学系外国人教師） Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2．4.10 (1990)	グラント K．グッドマン（カンザス大学教授・日文研客員教授） Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2．5．8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ（スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授） Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2．6.12 (1990)	リヴィア・モネ（ミネソタ州立大学助教授） Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉔	2．7.10 (1990)	李　国棟（北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師） LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉕	2．9.11 (1990)	馬　興国（遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授） MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉖	2.10．9 (1990)	ケネス・クラフト（リハイ大学助教授） Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ（カイロ大学講師） Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベーバルス王伝説における主従関係の比較」
㉘	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ（カレル大学日本学科長・日文研客員助教授） Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
㉙	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン（ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員） Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト（ワーゲニンゲン大学研究員） Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
㉛	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ（ワルシャワ大学教授・日文研客員教授） Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー（オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授） Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
㉝	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ（ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授） Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント（フンボルト大学教授・日文研客員教授） Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鴎外記念館」

㉟	3．9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス（琉球大学助教授） Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
36	3.10. 8 (1991)	王　暁平（天津師範大学助教授・日文研客員助教授） WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
㊲	3.11.12 (1991)	辛　容泰（東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員） SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
38	3.12.10 (1991)	洪　潤植（東国大学校教授） HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
㊴	4．1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン（デリー大学教授・日文研客員教授） Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4．3.10 (1992)	ジャン＝ジャック・オリガス （フランス国立東洋言語文化研究所教授） Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
㊶	4．4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー（プラハ国立博物館日本美術元キュレーター・日文研客員教授） Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4．5.12 (1992)	ポール・マッカーシー（駿河台大学教授） Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける最近の傾向」

43	4．6．9 (1992)	G．カメロン・ハーストⅢ（ニューヨーク市立大学リーマン広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長） G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へ－徳川時代における武芸の発達－」
44	4．7.14 (1992)	杉本　良夫（オーストラリア・ラトローブ大学教授） Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
45	4．9．8 (1992)	王　　勇（杭州大学日本文化研究センター教授・日文研外国人研究員） WANG Yong 「中国における聖徳太子」
㊻	4.10.13 (1992)	李　栄　九（大韓民国中央大学教授・日文研客員教授） LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
47	4.11.10 (1992)	ウィリアム D．ジョンストン(米国ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考 －『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」

○は報告書既刊

****
発 行 日　1993年1月30日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話（075）335-2048

問 合 先　国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課
****
©1993　国際日本文化研究センター

■ 日時

1991年2月12日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部